mizuki

みずき
第11号

大阪医科大学附属病院　病院医療相談部　医療連携室ニュース●2008年10月発行

contents

●第5回四医師会 大阪医科大学医療連携の会 ……P.1
●診療科の紹介「精神神経科」……P.2
●診療科の紹介「消化器外科」……P.3
●医療連携室から……P.4
●編集後記 ……P.4

第5回 四医師会 大阪医科大学医療連携の会（7月19日 たかつき京都ホテル）

大変暑い日でしたが、高槻市・茨木市・摂津市・大阪医科大学の各医師会から多数の先生方にご参加いただきました。

産婦人科学教室教授 大道正英が「女性のトータルヘルスケア」、放射線医学教室教授 鳴海善文が「泌尿器腫瘍と画像診断」と題した講演を行いました。本院へのご理解を深めていただければ幸いです。

懇親会では、普段あまり顔を合わせる機会のない先生同士の交流を深めていただきました。ご出席の医療機関さまの、より良い連携につながるきっかけになったことと思います。

診療科の紹介●精神神経科

精神神経科 科長
米田 博

多彩な特殊外来を展開し、患者さまそれぞれのニーズにあった治療を行っています

急激に変化する社会情勢は、一方でストレスの著しい増大をもたらし、
様々な精神疾患が増加し、症状も多彩になっています。
このような状況に対応するために多くの特殊外来を立ち上げ専門的な対応を行っています。
また他科との診療協力の一環としてコンサルテーション・リエゾン活動も行っています。
入院病床については大学病院（総合病院）の役割である
身体合併症を有する患者さまへの治療を積極的に進めています。

まず、統合失調症、感情障害などの内因性精神病に対しては、大学病院では急性期の治療を担うことから、新規抗精神病薬を積極的に使用しながら、認知機能低下や錐体外路症状を含む副作用の少ない治療を進めるとともに、精神科リハビリテーションについては地域の社会資源を活用しながら総合的な急性期治療を構築しています。

特殊外来としては、睡眠外来にて終夜睡眠ポリグラフなどの検査を行い、過眠症（ナルコレプシー、特発性過眠症など）、むずむず脚症候群、レム睡眠行動異常症などを中心に診断と治療を行っています。てんかんに対しては、発作抑制の薬物療法ばかりではなくQOLの向上を目指した治療を行っていますし、認知症においてはMRI、SPECTなどの画像診断や知的機能評価などの総合的な検査を行った上で、正確な診断による的確な治療やケアの選択を行っています。児童思春期では、不登校や摂食障害の他、多彩かつ多くの精神障害が来院するようになっており、児童思春期外来においては家族や学校などとも協力しながらきめ細やかな治療を行っています。性同一性障害については、主に産科・内分泌科、泌尿器科、形成外科、精神神経科がチームを組んでジェンダークリニックを構成して、精神科領域の治療を進めながら身体的治療の適応判定を行った上で包括的な治療を進めています。パニック障害と強迫性障害、外傷後ストレス障害（PTSD）においては認知行動療法と抗うつ薬による薬物療法を組み合わせた治療法が開発されており、それぞれ特殊外来を立ち上げて対応しています。また特殊な専門治療として重症うつ病や疼痛性障害に対してECT外来を立ち上げ、麻酔科と連携しながら修正型電気けいれん療法を行っています。

一部の特殊外来については初診から予約制を取っているものもありますが、申し込みが大変多く、予約が取りにくい外来もございます。詳しくは精神神経科のホームページをご覧いただくか、医療連携室にご確認下さい。

精神神経外科HP
http://hospital.osaka-med.ac.jp/about/departments/neuropsychiatry/index.html

診療科の紹介●消化器外科

消化器外科 科長
谷川 允彦

世界トップレベルの内視鏡外科手術をメインに個々の患者さんにベストの治療を行います

- ●腹腔鏡下胃癌・大腸癌手術の実績は国内のみならず世界トップレベルです。
- ●高度進行胃癌には術前抗癌剤治療を併用して根治切除率を高めています。
- ●高度進行直腸癌にも放射線抗癌剤治療後に究極の肛門温存術を目指しています。
- ●食道癌には放射線や抗癌剤の感受性を判定し集学的治療で根治性を高めています。
- ●肝臓癌などにも安全で的確な切除を行うとともに生体肝移植も行っています。

当科では食道・胃、大腸・肛門、肝臓・胆嚢・膵臓の臓器別に分かれ、外来初診から術前検査・入院・手術・術後管理、さらに退院後経過観察までを一貫して行うことでより優れた診断と治療が患者さん本位に実践できる体制としています。当科の診療の中でも特筆すべき取り組みは、なんと言っても内視鏡外科手術（腹腔鏡下手術）です。胆嚢だけでなく、胃癌や大腸癌などに対する腹腔鏡下手術に国内でもいち早く着目して実践してきました。腹腔鏡下手術では傷が小さくて分散しているため、開腹手術に比べて、術後の痛みや癒着が少なく、手術からの回復が早くて腸閉塞などの後遺症が少ない利点があります（図1）。また、腹腔鏡の拡大視・近接視効果はより繊細な手術を可能とします。当科では癌手術の原則遵守を基本に、卓越した手技を用いて段階的に適応を拡大してきました。これまでに、500件を超える腹腔鏡下胃癌手術、1400件を超える腹腔鏡下大腸癌手術を行ってきた実績があり、胃癌と大腸癌をあわせた腹腔鏡下手術の件数と成績は国内のみならず世界でもトップクラスです。もちろん、腹腔鏡下手術だけでなく、個々の患者さんに最適の治療を心がけています。食道癌には放射線や抗癌剤に対する感受性を判定して集学的治療を加え、根治性を高める手術を年間40件以上行っており、良好な成績を得ています。胃癌には腹腔鏡下手術や術後のQOLを高める縮小手術のほかに、高度進行癌には術前抗癌剤を併用して根治切除率を高めています。大腸の中でも直腸癌にはできるだけ肛門を温存しますが、高度進行直腸癌にも放射線抗癌剤治療後に究極の肛門温存術を目指しています（図2）。また、肝・胆・膵では肝臓癌などに対して年間70件以上の肝切除術を行っていますが、これに加えて肝臓癌や高度肝硬変に対する生体肝移植もこれまで30件以上に行って良好な成績を得ています。さらに、ご紹介医の先生方との連携もスムーズに行ってお一人おひとりの患者さんにベストのチーム医療を提供すべく努力しておりますので今後ともよろしくお願い申し上げます。

図2）括約筋部分切除併用超低位直腸切除術（究極の肛門温存術）

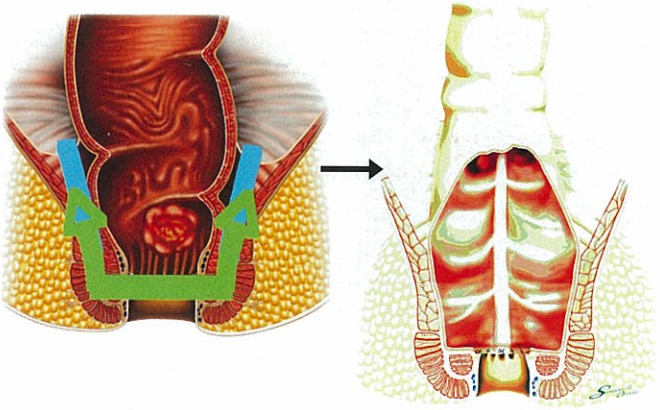


図1）胃癌手術後1週間目の創の比較

開腹　　腹腔鏡補助下　　完全腹腔鏡下

医療連携室から

●医療連携医師懇親会

私たち医療連携室の業務においては他の医療機関さまとの円滑な関係を築くことが一番大切なことですが、そのためにも院内の医師との緊密な連携が欠かせません。しかし、通常業務中はそれぞれが忙しく、最低限のコミュニケーションしか図れないのが現状です。そこで年に一度「懇親会」という場を設けて、より円滑な人間関係を築こうと企画しました。日常の業務以外ではなかなか接点のない各診療科の医師同士のコミュニケーションの場にもしていただけたらという思いです。職員食堂を利用して週末の業務終了後に開催することとし、今回で3回目を迎えました。

当初は今までになかった企画だけに、「一体これは何の会なの?」と聞かれましたが、ようやく私たちの思いが伝わり始めたようです。

業務中にはなかなか詳しく聞けない医療連携室への忌憚のない意見や要望、はたまた仕事を離れた趣味やご家族の話まで様々な話題で盛り上がり、会の途中には急に連携室員の自己紹介を要望されて、一同どきどきしながらマイクを持たせていただく場面もありました。医師以外にも他部署の事務スタッフも参加しており、科を超えて、部署を超えての話の輪が広がり、予定時間を大きく超えての懇親の場となりました。

本院は医師の数だけでも研修医を含めると400名近くになり、なかなかきめ細かな連携は難しいのですが、このような会を通じて少しでも院内の結束を固め、ひいては他の医療機関さまのお役に立てればと考えています。

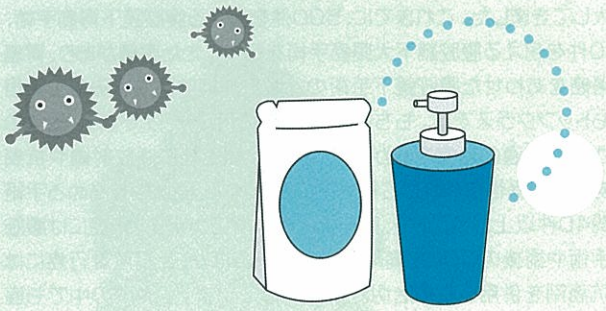
過日、院内のスタッフ向けに開催された感染対策講演会で、県西部浜松医療センターの矢野邦夫先生のお話を聞かせていただきました。

院内の感染対策についての大変興味深い講演でしたが、余談で出てきた日常生活における感染にまつわる話もまた面白いものでした。

血液型がO型の人は他の型の人よりもノロウイルスにかかる危険性が11倍も高いとか。「だからいつも私だけがかかるんだ」とO型のスタッフ一同大いに納得でした。大雑把といわれるO型なのに資料を見事にファイリングしていくTさん、几帳面といわれるA型なのに机の上に書類が山積みになっているNさん。そんな当部署では、性格診断よりずっと確かな血液型診断のようです。ノロウイルスにもいろいろな種類があるそうですが、これからの季節、特にO型の人は用心をしたほうがいいかもしれません。ちなみに反対に強いのはB型だそうです。

また、シャンプー&リンスの詰め替えについてもドキッとする話が。空になった容器をすすいだ後に乾かさないで次のシャンプーなどを入れると、緑膿菌が繁殖して、"緑膿菌で頭を洗っている…"なんてことにもなりかねないそう。そういえば、詰め替え用のパッケージに「十分乾かして」と書いてあったような気がしますが、ついつい面倒で、すすいですぐに詰め替えていました。緑膿菌は乾燥に弱いそうなので、これからは面倒がらずに乾かさなければと思いました。

あまり気にしすぎては生活していくのも大変ですが、できる範囲で日々の生活を清潔に心がけたいものですね。



編集後記

中国が世界に向けて発信した真夏の祭典「北京オリンピック」も終わり、我が国では爽やかな行楽シーズンを迎えております。さて、オリンピックでは期待通りの活躍をした選手・種目、期待にそえなかった選手・種目と悲喜交々でした。しかし、観戦する私たちにとっては、日本選手の結果に一喜一憂するよりも、参加出来る素晴らしさを感じ取る事が良かったのではないかと思いました。医療界では、一つの事件をきっかけに、大きく「医療崩壊」がクローズアップされました。私たち医療に従事する人間にとって、今まで以上に深く医療について考える時期に来たのではないかと改めて考えさせられました。この小さな広報誌「みずき」が少しでも皆様方のお役に立てるよう、今後も努力を続けていきたいと思います。

(T.S)

大阪医科大学附属病院 病院医療相談部 医療連携室　〒569-8686 大阪府高槻市大学町2-7
TEL.072-684-6338（医療連携室直通）FAX.072-684-6339

作成　2008年10月